

第7回(2019年度)

総合福祉ホーム芙蓉園

園内改善活動発表会

抄録集



日 時： 2019年8月30日（金）10時～14時

会 場： 総合福祉ホーム芙蓉園 5階機能訓練室

社会福祉法人 芙蓉会

総合福祉ホーム芙蓉園

もくじ

| | |
|--------------------------------------|----|
| ○ 園内改善活動発表会の概要 | 3 |
| ○ 発表テーマ・発表者一覧 | 4 |
| ○ 発表抄録 | |
| 1. ショートステイ誕生祝い会 | 5 |
| 2. 施設生活におけるアクティビティの重要性 | 6 |
| 3. 方向別排泄による業務改善 | 7 |
| 4. 認知症トータルケア | 8 |
| 5. 個別対応件数増加に伴うリスクの軽減と笑顔の増加 | 9 |
| 6. 「乳和食」で美味しく健康に | 10 |
| 7. デイサービスが考える地域密着型サービスとしての取り組みと利用者活動 | 11 |
| ○ 表彰審査の実施内容 | 12 |

園内改善活動発表会の概要

1. 趣 旨

芙蓉会が求める人材像の人材育成の一つとして「芙蓉会共生学会」があります。その一環としてアクティブ福祉 in 町田への参加も含め、法人使命に寄与する実践や研究の発表会が有効と捉えております。園内改善活動を通して、相互啓発やチームワーク形成の向上を図り、ボトムアップ的な事業推進の強化を期待しております。この研究発表会を実施する事で、芙蓉園全体としての組織的な園内改善活動の確立を目指します。

2. 目 的

- (1) 日々の実践を社会的価値に高めること
- (2) 共有価値として相互啓発し、チームワーク形成及び強化を図ること
- (3) 実践・研究活動を通して専門性やケアの質の向上を図ること
- (4) 芙蓉会の使命に貢献できる人材を育成すること

3. 実施形式

- (1) 学会形式による発表（パワーポイント使用）
- (2) 発表時間 1人 18分（発表12分、質疑応答など5分）
- (3) 発表内容
 - ① 利用者介護の質の向上につながる取り組みや試みに関すること
 - ② 地域の支え合い活動等、地域福祉の向上への取り組みに関すること
 - ③ 相互啓発、モチベーション・チームワークの向上などに関すること
 - ④ 業務や環境等の見直しによる効率化などに関すること
 - ⑤ その他、業務改善による介護・福祉の向上に関すること
- (4) 審査・表彰の実施
 - ① 理事長・園長及び外部委員による審査
 - ② 表彰は、理事長賞、審査員賞、奨励賞の3つ

4. 実施概要

- (1) 日時：2019年8月30日（金）10:00～14:00
- (2) 会場：芙蓉園5階機能訓練室

5. 参加のご案内

当日の参加は自由で公開する

6. 事務担当

芙蓉園・総務課 電話：042-796-2736

次第・発表テーマ・発表者

次 第

開会・挨拶 (10:00~)

午前の部

| 時間 | 発表テーマ | 発表者部署・氏名 |
|-----------------|--|---|
| 10:10~ 10:28 | ショートステイ誕生祝い会 ~皆が幸せになれる瞬間を~ | 介護課5階 ショートステイ 山縣 宏文 萩野 美佐子 斎藤 美由紀 薦野 恵美 |
| 10:28~ 10:46 | 施設生活におけるアクティビティの重要性 ~日頃の小さな手伝いから考える~ | 介護課4階 柴田 美咲 涌井 遼 三宅 菜月 |
| 10:46~ 11:04 | 方向別排泄による業務改善 ~利用者に寄り添うケアを目指して~ | 介護課3階 勝野 泡 岸田 晃 |
| 11:04~ 11:22 | 認知症トータルケア ~居心地のよいフロアを目指して~ | 介護課2階 村野 侑紀 染谷 賢治 露木 由助 |
| 11:22~ 11:40 | 個別対応件数増加に伴うリスクの軽減と笑顔の増加 ~危ないからやめようをやめよう~ | リハビリ課 飯田 麻未 |

休憩 (11:40~12:30)

午後の部

| | | |
|-----------------|--|----------------------|
| 12:30~ 12:48 | 「乳和食」で美味しく健康に ~料理に乳製品を加えた健康食~ | 栄養課 川端 彰 中西敏文 |
| 12:48~ 13:06 | デイサービスが考える地域密着型サービスとしての取り組みと利用者の活動 ~有する能力を大切に~ | 地域密着型 通所介護 つるま屋 石井 正 |

表彰式・講評 (13:26~13:45)

閉会・挨拶 (13:45~)

| | | | |
|----------------------|--|-------|-------------|
| 主　題 | ショートステイ誕生祝い | | |
| 副　題 | 皆で笑顔になれる瞬間を | | |
| 活動期間 | 平成30年6月～ | キーワード | 利用者・職員皆が笑顔に |
| 発表者 | 山縣宏文・蕪野恵美（介護課ショートステイ） | | |
| 1. 改善活動前の状況と課題 | <p>利用者より「誕生祝いをやって欲しい」との要望があったが、ショートステイの特性上不定期な利用であり、365日異なる利用者への対応で利用者・職員が一堂に会する時間もなく、誕生祝いは実施してこなかった。「利用者・職員皆が笑顔になれる瞬間を作れないか?」と職員からの声もあり、「誕生祝い」を行う事とした。</p> | | |
| 2. 改善活動の目標と期待する成果・目的 | <ul style="list-style-type: none"> ・誕生日利用の利用者の誕生祝いを実施し、長生きを祝福される喜び・嬉しさを感じて頂く。「ショートステイに来て良かった」と感じて頂く。 ・祝福される誕生者・祝福する方・職員一同が参加し、皆で祝福し、笑顔になる瞬間が出来る。 ・利用者同士、また職員と利用者との交流・コミュニケーションのきっかけが増える ・参加した利用者に「ここに来て良かった」「また行ってみたい」と感じて頂く。 | | |
| 3. 具体的な取り組みの内容 | <ul style="list-style-type: none"> ・滞在する利用者・職員が可能な限り一堂に会する時間帯に実施。試行（前年度 6～12月）した結果、昼食前に行う事となった。 ・事前準備として利用日程に合わせた誕生祝い実施日・担当職員の設定、担当職員による写真撮影～色紙の作成 ・実施方法の手順例を記した書面を作成し提示。 ・誕生祝いは原則1日1名とし、5分程の短時間で実施。食堂で利用者・職員一同で祝福する事を基本とする。 ・実施毎に利用者や参加職員を対象としたアンケートを実施して、改善に繋げた。（今年度5～7月） | | |
| 月) | <ul style="list-style-type: none"> ・ケーキの飾り・花（造花）・掲示物の作成及び更新。 | | |
| 4. 取り組みの結果・考察 | <p>殆どの利用者が笑顔で喜んでいた。自己紹介をしたり・歌を披露する利用者もいる等、自立度の高い利用者にとって自己表現の場にもなっている。普段開眼・発語することが少ない利用者でも目を開けたり、片言で「ありがとう」という言葉が聞けた。他の利用者も、普段は食事配膳直前に食堂に来る利用者でも、誕生祝いをする日は誕生者を祝福する為に早めに食堂に来て、参加するようになっている。</p> <p>誕生祝い実施時に、誕生日を迎えた利用者・祝福する利用者・職員皆が笑顔に包まれ、フロア全体の一体感を感じる事が増えてきている。誕生祝いに向けた活動を通して、職員間のコミュニケーションが深まった。</p> | | |
| 5. まとめ・結論 | <p>前年度の「いきいき活動」のようなショートステイを代表するアクティビティ活動となるよう、アンケートの意見等を元に内容の充実を図る。</p> | | |
| 6. 倫理的配慮に関する事項 | <p>本研究内容における写真・動画撮影は、本人・家族の許可を取って掲載している。</p> | | |
| 7. 参考文献 | 特に無し | | |
| 8. 提案と発信 | <p>誕生日利用の利用者を対象として昼食前の時間に誕生祝いを行い、利用者・職員「皆が笑顔になれる瞬間」を少しでも増やせるよう取り組んでいく。</p> | | |

| | | | |
|----------------------|--|-------|--------------|
| 主 題 | 施設生活におけるアクティビティの重要性 | | |
| 副 題 | 日頃の小さな手伝いから考える | | |
| 活動期間 | 2019年3月 ~ | キーワード | アクティビティ 機能維持 |
| 発 表 者 | 柴田美咲・涌井遼・三宅菜月 (介護課4階 介護員) | | |
| 1. 改善活動前の状況と課題 | <p>利用者が行っている日常的な「手伝い」に着目した時、それが単なる「職員から利用者に依頼した作業」ではなく、利用者の1つの役割になっているように感じた。施設での生活は特別な行事がないと、どうしても退屈になってしまうことは否めない。利用者のQOLを考えると、時間や能力を持て余している状況も見て取れる。利用者からも「やる事が無いから寝てる」等の話があり、臥床時間を増やす原因となり、機能の低下に繋がる可能性がある。</p> | | |
| 2. 改善活動の目標と期待する成果・目的 | <p>日常生活の中に「手伝いのような小さなアクティビティ(以下アクティビティ)」を取り入れることによって、利用者の持つ能力を活かす事に繋がり、結果として機能維持や生活にメリハリが生まれることになると考える。</p> | | |
| 3. 具体的な取り組みの内容 | <p>現在利用者が行っているアクティビティの種類・人数を把握し、取り組み状況を整理する。また、行っている利用者本人に行っている感想や継続したいかの有無を聞いてみた。職員側から見て、アクティビティがある事によって利用者の心身状態にどのような影響が見られているか、考察していった。さらに、現在のアクティビティを今後も継続していくためにはどうしていくべきか、どう働きかけていくべきかを考え、連絡メモなどで周知し、実施できるようにした。</p> | | |
| 4. 取り組みの結果・考察 | <p>現在約10人の利用者がタオル畳みや下膳、力一テンの開閉、食札並べ等を実施している。実施の際の声掛けを職員に周知した上で、利用者に声をかけてもらう機会が増えた。また、アクティビティがある事によって生活にメリハリができ、毎日の活動として行う事が心身機能の維持に繋がっている。利用者からも「やる事があるのが嬉しい。」「暇だから気晴らしになる。」との話も聞かれており、日頃の気分転換にもなっている。</p> | | |
| 5. まとめ・結論 | <p>施設生活において、他人にやってもらうことが多くなり利用者自身が行って他者に認められる機会が減ってしまう。アクティビティはそんな機会を増やすことに繋がっている。毎日のように行っているからこそ利用者の状況の変化に気が付きやすくなり、利用者に合わせて早期対応がしやすくなれる。また、行っているアクティビティから新たに利用者が出来ることの発見に繋がる事もある。</p> | | |
| 6. 倫理的配慮に関する事項 | <p>利用者を差別化することが目的でなく、この事で利用者の損益を生まない様にする。</p> | | |
| 7. 参考文献 | <ul style="list-style-type: none"> ・山口晴保、佐土根朗、松沼記代、山上徹也著「認知症の正しい理解と包括的医療ケアのポイント第2版快一徹脳活性化リハビリテーションで進行を防ごう」協同医書出版社 p58表2-1 | | |
| 8. 提案と発信 | <p>今後もアクティビティを安全に継続していくためフロア連絡メモで周知していく。また、継続が難しい時には代替案を提案していくなどの対応を行っていく。</p> | | |

| | | | |
|---|--|-------|------|
| 主 題 | 方向別排泄援助による業務改善 | | |
| 副 題 | ～利用者に寄り添うケアを目指して～ | | |
| 活動期間 | 平成 31 年 2 月～ | キーワード | 業務改善 |
| 発 表 者 | 勝野洵・大橋直人・岸田晃 | | |
| 1. 改善活動前の状況と課題 | <p>職員が自分の受け持つ方向だけに目を向けてしまい、他方向に対する意識が薄れてしまっている事もあった為、職員の意識改革の必要性がある事もわかった。</p> <p>3階フロアは『ひまわり』『りんどう』『しょうぶ』の3方向にフロアがわかれている。今まで、トイレでの排泄援助を実施する時は『しょうぶ』側トイレのみを使用して行っていた。その為、利用者に対しての対応が遅くなり自身で違う方向のトイレを使用してしまい、転倒などのリスク、別方向からのコール対応等が遅延していた。また、排泄後に居室に戻る待ち時間が多くあった。</p> | | |
| 2. 改善活動の目標と期待する成果・目的 | <p>5.まとめ・結論</p> <p>3方向で排泄援助を行う事で、「待つ時間が少なくなったから嬉しい」などの言葉が聞かれた。1方向から3方向へ変更したことにより、利用者への負担は軽減できたと思われる。</p> <p>時間だけに囚われてしまう事もあり利用者に寄り添うケアまでには至っていない所を改善していく事が課題である。</p> <p>今後は、排泄援助だけではなく3方向に分けての援助を実施していく事を目標にし、職員の意識を高めていけるような実施方法を検討していく。</p> | | |
| 3. 具体的な取り組みの内容 | <p>6.倫理的配慮に関する事項</p> <p>本研究発表を行うにあたり、本人（家族）に口頭にて確認をし、本研究以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。</p> | | |
| 4. 取り組みの結果・考察 | <p>7.参考文献</p> <p>一般社団法人 日本ユニットケア推進 HP</p> <p>8.提案と発信</p> <p>今回行った排泄援助による業務改善では利用者への負担を軽減する事や事故の削減ができた。</p> <p>今後フロア内の職員で話し合い、連携を取り、更に事故の削減や迅速なコール対応を目指す。</p> <p>今回の活動は方向別の排泄援助のみだったが、離臥床も方向別で行うのかなど、継続して今回の活動の話し合いをしていきたいと考える。</p> | | |
| 排泄援助を3方向で行う事により、排泄援助時間のヒヤリや事故件数は減少した。トイレへの待ち時間・居室に戻るまでの時間短縮に繋がった。しかし、3方向に職員が分かれれる為、同じ方向でコールが続く時には対応が遅れてしまう事も見受けられた。 | | | |

| | | | |
|----------------------|--|-------|----|
| 主 題 | 認知症トータルケア | | |
| 副 題 | 居心地のよいフロアを目指して | | |
| 活動期間 | 平成31年3月～令和元年7月 | キーワード | 環境 |
| 発 表 者 | 染谷賢治・露木由助・村野侑紀 (介護課2階 介護員) | | |
| 1. 改善活動前の状況と課題 | <p>現在2階では食堂などの共有スペースにおいて複数の利用者による大声が時折耳に入り、中にはその大声を不快に思われる方もいた。施設目標である「利用者が安心して生活をする」に着目し、この大声を軽減することによってこの目標の実現を図れるのではないかと考えた。これまで大声に対して具体的な対応策を協議することなく、各職員その場限りの対応を取り、根本的な解決には至らなかった。今回、一名の利用者を選定し、大声に対する原因の調査と現状の打開策が最優先課題として挙がった。</p> | | |
| 2. 改善活動の目標と期待する成果・目的 | <p>今回の活動を通して、対象利用者のこれまでの生活歴や現在の生活情報を集め、それを基にアセスメントを行い、普段のケアに取り入れることで型の決まつたケアではなく、個々に合った根拠のあるケアを提供する事で利用者が居心地の良いと感じる生活環境に整えていく。</p> | | |
| 3. 具体的な取り組みの内容 | <p>①日々の生活状況の記録、アセスメント、モニタリングをし、アプローチの内容を多職種で協議。 ②座薬不使用の排泄コントロール。 ③日中の余暇活動（アクティビティ）の実施。 ④センターシートの活用。</p> | | |
| 4. 取り組みの結果・考察 | <p>実施前は便秘のため座薬を使用し排便を促すことで不穏状態になっていたと考えていた。フロアで日々の様子を観察しアセスメントした結果、身体面や精神面、環境面などの複数の要因から問題点を検討。さらにセンターシートを活用し、1日の睡眠・水分・排泄・不穏の有無を可視化した。特定利用者の介入の有無により平穏な状態と不穏な状態の違いが日によって異なって見られた。</p> | | |
| | <p>また、居室内での単独の時間を設けることでも不穏軽減の効果が見られた。このことで対象利用者の不穏の主な原因是周囲との対人関係や生活環境による影響が強いことが今回の結果から判明した。</p> | | |
| | <p>5. まとめ・結論</p> <p>日々の細かな情報を記録するよう職員に呼びかけることで、普段の些細な変化の様子が垣間見えた。職員の利用者に対する関わり方にも変化が見られた。介護員だけでなく、多部署の職員からも意見が挙がり、より深いアセスメントを行えるようになった。そして潜在的な課題点を明確化することに繋がった。このことから多職種との連携を強化することで多方面の視点から新たな問題点の気付きに繋がり、連携の重要性を再認識した。</p> | | |
| | <p>6. 倫理的配慮に関する事項</p> <p>なお、本研究発表を行うにあたり、本人（家族）に口頭にて確認をし、本研究発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。</p> | | |
| | <p>7. 参考文献</p> <p>「認知症ケアの実際Ⅱ：各論」 日本認知症ケア学会(2016) (株)ワールドプランニング</p> | | |
| | <p>8. 提案と発信</p> <p>ニーズの多様性や複雑化に伴い、福祉サービスは施設個々の特色が他施設と競争化してきている。従来のサービス内容で満足せず、より質の高いサービスの提供に努めていかなければならない。今後は利用者の生活環境にも注目し、多角的にアセスメントを重ねて多職種との連携を図り、生活環境の改善を図ることで一人でも多くの利用者の認知症周辺症状の軽減を図っていく。</p> | | |

| | | | |
|----------------------|--|-------|----------|
| 主　題 | 個別対応件数増加に伴うリスクの軽減と笑顔の増加 | | |
| 副　題 | 危ないからやめようをやめよう | | |
| 活動期間 | 令和1年5月～7月 | キーワード | 個別対応・QOL |
| 発表者 | 飯田麻未・石川彩美（リハビリ課 機能訓練指導員） | | |
| 1. 改善活動前の状況と課題 | <p>リハビリ課は今年度新設された課である。現在までは利用者の嚥下・機能評価や福祉用具の選定、緊急を要する利用者対応に加え、専門知識の普及活動として教育や研修に費やす時間が多かった。実員は2名で依頼業務を実施するのがやっとの状況であった。今後は利用者の個別対応件数の増加と個別対応の更なる充実化が急務と考えた。</p> | | |
| 2. 改善活動の目標と期待する成果・目的 | <p>達成目標を1週間で個別対応を100件実施することとした。期待できる成果として以下の4点を挙げる。 ①褥瘡予防評価の実施 ②利用者状況に適した具体的アドバイスや生きた情報共有ができる ③利用者の最大能力を生かしたケアの実践方法の提案 ④利用者の能力維持</p> | | |
| 3. 具体的な取り組みの内容 | <p>利用者の状態、環境等を踏まえ、ベッドサイド対応者と歩行等の粗大運動対応者に分け、入浴日を避けて週間スケジュールを作成する。毎月末に利用者評価を振り返り終了や継続、新規追加利用者等を課内で評価を行う。個別対応運動はリハビリ課5名で実施する。</p> | | |
| 4. 取り組みの結果・考察 | <p>個別対応件数は検討を重ね上昇し、月間300件を超える実績となった。個別対応件数が増えたことによって利用者のより詳細な心身機能の把握、新たな能力の発見やそれに伴い適正なケア方法の提案がフロアに提供できるようになった。より多くの利用者との関係性構築もでき、スケジュール表を作成したことで公平に実施回数が増えていることも利点としてあげられる。課内でも同一利用者についての課内検討が容易になり、個別対応の重要性が共有されている。これらの取り組みによって変化が生じた利用者を紹介する（A様）。</p> | | |
| 5. まとめ・結論 | <p>課内での個別対応に関する意識の向上によって、今まで関わる機会の少なかった利用者とも関係性を構築する機会を得ることができた。利用者の状態把握を課内で共有できたことで、状態変化に対応した福祉用具選定等も円滑に行えるようになった。取得した情報を生かしケアに生かせるよう多職種で円滑に連携をとっていく必要がある。リハビリ課が利用者と共に過ごす限られた時間の中で利用者の新たな一面を発掘できるよう今後も積極的に関わっていく。正確な利用者の機能面を多職種で共有することで「あぶないからやめよう」と介護員だけでは実施困難な内容もりハビリ課が関わることで、リスクを軽減して挑むことができる貴重な時間として、安全に提供できるよう今後も携わっていきたい。</p> | | |
| 6. 倫理的配慮に関する事項 | <p>本研究発表を行うにあたり、本人（家族）に口頭にて確認をし、本研究以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。</p> | | |
| 7. 参考文献 | Rehaje vol.6 特集1 疾患別歩行訓練 | | |
| 8. 提案と発信 | <p>取得した情報はその部署内で留まる傾向が強い。多職種で連携を円滑化し、より利用者らしい生活の提案ができるよう、更に密な関係性を部署間で構築していきたい。</p> | | |

| | | | |
|--|--|-------|--------------|
| 主 題 | 「乳和食」で美味しく健康に | | |
| 副 題 | 料理に乳製品を加えた健康食 | | |
| 活動期間 | 平成31年4月~ | キーワード | 乳和食・カルシウム・美味 |
| 発表者 | 中西 敏文、川端 彰（栄養課） | | |
| 1. 改善活動前の状況と課題 | <p>芙蓉園で「食事の嗜好調査」を実施すると、「味付けが薄い」という意見が27.3%も見られた。厚生労働省の「日本人の食事摂取基準」では塩分の摂取基準は男性8.0g未満、女性7.0g未満となっている。芙蓉園の献立は煮物が多く、醤油やソースなどの調味料を料理にかけなくても、召し上がれる濃度になっており、塩分量が少ないとされる濃度になってしまっている。しかし、高齢者になると、加齢による食欲低下、唾液の分泌低下、薬による副作用等の要因から味覚の低下が見られる。味覚の低下から食事が摂れなくなり、必要栄養量や熱量（カロリー）が不足する事を起因とし「サルコペニア、フレイル、褥瘡」のリスクが高まる。仮に、味覚が低下するからといって、現在よりも食塩量を増やすと「高血圧や腎機能の低下、糖尿病の悪化」から身体機能の低下が懸念される。また、カルシウムの必要量は男性600mg、女性500mgであるが、現在の献立では、給与栄養量は512mgと必要量を満たしていない。</p> | | |
| 2. 改善活動の目標と期待する成果・目的 | <p>料理を調理する際、伝統的な調味料である、味噌や醤油など他に「牛乳」を加える事で食材本来の風味や特徴を引き出す事で、食塩や化学調味料を減らし、不足しているカルシウムを補い、日々の料理を美味しく召し上がっていただく調理法である「乳和食」を取り入れる事が、芙蓉園のご利用者にとって、非常に有益であると考えた。</p> | | |
| 3. 具体的な取り組みの内容 | <p>刻み食や極刻み食、ミキサー食は、出汁やトロミ剤を添加するため、常食よりも栄養値が低下してしまう。また、食材を細かくしているため味が単一になる事が多い。そこで、これらの食事形態を「乳和食」として提供する事にした。尚、牛乳には87.4%の水分が含まれるため、スキムミルク（水分含量3.8%）を添加し、塩分を増やさず、うま味やコク、カルシウム、タンパク質を充足させる目的とした調理法を実施する取り組みを行った。</p> | | |
| 4. 取り組みの結果・考察 | <p>刻み食を召し上がっている利用者に、食事の事を伺うと、「調理師さんが変わったの？最近は風味が良く美味しい」と話された。また、現在の献立での問題点を調理法の変更から改善する事ができた。塩分やカルシウムの問題を牛乳が持つ「カルシウム」や「うま味」、「コク」が解決の糸口となり、利用者の食欲を増進させ、喫食率の増加から、低栄養や褥瘡の防止を図る事ができた。</p> | | |
| 5. まとめ・結論 | <p>従来の調理法を基本としながらも、調理法の工夫からより良い食事を提供する事ができた。</p> | | |
| 6. 倫理的配慮に関する事項 | <p>本研究内容における写真・動画撮影は、ご本人様・ご家族様の許可を取って掲載させて頂いています。</p> | | |
| 7. 参考文献 | <p>厚生労働省：日本人の食事摂取基準 2015 文部科学省：日本食品標準成分表</p> | | |
| 刻み食や極刻み食、ミキサー食は、出汁やトロミ剤を添加するため、常食よりも栄養値が低下 | | | |

| | | | |
|----------------------|--|-------|-------------|
| 主　題 | デイサービスが考える地域密着型サービスとしての取組みと利用者の活動 | | |
| 副　題 | 有する能力を大切に | | |
| 活動期間 | 36ヶ月 | キーワード | 地域密着型・有する能力 |
| 発表者 | 石井 正 | | |
| 1. 改善活動前の状況と課題 | <p>開設当初は下肢筋力向上支援による外での活動が多かったため「連絡をしてもなかなか繋がらない」「なにをしているかわからないところ」となっていて稼働率も伸び悩んでいた。</p> | | |
| 2. 改善活動の目標と期待する成果・目的 | <p>地域密着型デイサービスに変わった契機に「なにをしているかわからないところ」から脱却し「地域と繋がるデイサービス」を目指した・下肢筋力維持向上の外出支援は継続・参加者の有する能力を大切にしたサービス・参加者が地域の方々と関わりを持つことができる場所・地域の方々が気軽に立ち寄ることができる場所の4点を柱に事業を改めた。</p> | | |
| 3. 具体的な取り組みの内容 | <ul style="list-style-type: none"> ・下肢筋力維持向上のための外出は半日とする ・認知症状態にある方、様々な疾患があっても、住み慣れた地域で暮らし続けることができる ・地域の方々に知ってもらえる活動をおこなう・「だれかの役にたちたい」想いを実現できる活動をおこなう・地域の一拠点として、近隣にある社会資源との関わりを深める活動をおこなう・地域に住まうさまざまな方と繋がりを作り、ボランティア活動や気軽に立ち寄れる場所作りをおこなう・参加者自らの声で営業活動やSNSへ活動内容を定期的に投稿し周知をはかる。 | | |
| 4. 取り組みの結果・考察 | <ul style="list-style-type: none"> ・地域活動を充実したことで地域とも関係性が広がった・地域に住む知的障がいを持つ女性と間接業務のボランティアとして繋がった・社会に出る自信を得ることができた・「参加者のやってみたいこと」「誰かの役にたちたい想いを実現する」活動がスタッフもやりがいになった | | |
| 5. 稼働率が向上した | <ul style="list-style-type: none"> ・参加者の「誰かの役にたちたい想い」を大切にしながら地域と繋がる活動は幅広く、困難で、日々の振り返りや事例検討会を行うことが必要・参加者にとって活動を「やらされている」とならないようコミュニケーションの重要性を認識した・地域の方が来訪されるようになると参加者を見る目が手薄になり、所在不明や転倒事故の事案もみられるようになった・地域との繋がりが自己実現に繋がることができた。 | | |
| 6. まとめ・結論 | <p>なお、本研究(実践)発表を行うにあたり、ご本人(ご家族)に口頭にて確認をし、本発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。</p> | | |
| 7. 優れた取り組み事例 | <p>「日本でいちばん大切にしたい会社」1～6(2008～2018) 坂本光司 あさ出版 「大人の道徳 - 西洋近代思想を問い合わせ - 」(2018) 駒橋憲一 東洋経済新報社 「鼻めがねという暴力 - どうすれば認知症の人への虐待を止められるか - 」(2016) 林田敏弘 harunosora</p> | | |
| 8. 提案と発信 | <p>認知症状態や様々な疾患や障がいがあっても、健常者であっても、住み慣れた地域で暮らし続けたい想いは誰しも同じではないでしょうか。もともと地域に住んでおられる方達は「ごちゃまぜ」という言葉ではなく、助け合いながら暮らしています。地域の一員であるつるま屋は、住み慣れた地域で、あたりまえの暮らしが続けられるお手伝いをしています。</p> | | |

表彰審査の実施内容

1. 表彰審査の考え方

- (1) 改善活動の動機、取り組む姿勢、業務改善の成果・効果を評価し、さらなる改善動機の向上につなげる
- (2) 改善活動としての方法・手法やプロセスを評価し、科学的・分析的手法の向上を図ることで、さらなる業務の効率化、サービスの質の向上につなげる

2. 審査項目と評価の視点

- (1) 主題（サブタイトルを含む）の妥当性
実践・研究内容を的確に表していて、興味・関心がもたれる表現になっているか
- (2) 改善活動の価値性
改善活動テーマ選定の着眼点、取り組み方法の意義、考察の視点、また研究内容が、それぞれの事業活動や実践活動により影響を及ぼすと期待できるか
- (3) 改善活動の正確性と深度
改善活動の取り組み方法、例えば課題解決のプロセスが、根拠に基づく基本的な分析的手法を踏まえているか、問題点をどの程度掘り下げて検討したのか
- (4) プレゼンテーション能力
論旨の明快性、資料（パワーポイントも含む）の正確性、説明方法の明確性等

3. 審査方法

- (1) 「芙蓉園園内改善活動発表会審査票」の点数の合計点を算出する。（1次審査）
 - ・ 4項目、5段階評価で、最高 20 点、最低 4 点
 - ・ 4 審査員で、合計最高 80 点、合計最低 12 点
- (2) 1次審査の合計点を参考にして、審査員の合議で各賞を決定する。（2次審査）
 - ・ 理事長賞 1題・・・総合的に優れている
 - ・ 審査員賞 1題・・・改善活動のプロセスが整っている
 - ・ 奨励賞 1題・・・更なる取り組みで大いに期待できる

4. 審査員

- (1) 芙蓉会理事長 吉田 實
- (2) 芙蓉園園長 内山 良平
- (3) 大妻女子大学名誉教授 是枝 祥子先生
- (4) 町田福祉保育専門学校 三浦 玲子先生



社会福祉法人芙蓉会 総合福祉ホーム芙蓉園
地域に根差して53年！！皆様が暮らしやすい街を目指します！！

総合福祉ホーム芙蓉園の事業所

○194-0005 東京都町田市南町田5-16-1

代表電話：042-796-2736

ファックス：042-796-2734

- ・社会福祉法人芙蓉会法人本部
- ・特別養護老人ホーム芙蓉園
- ・短期入所芙蓉園
- ・デイサービスセンター芙蓉園
- ・認知症対応型デイサービスほのか
- ・居宅介護支援事業所芙蓉園
- ・ヘルパーステーション芙蓉園
- ・南第1高齢者支援センター（町田市受託事業）

○194-0005 東京都町田市南町田 1-5-24

- ・地域密着型デイサービスつるま屋

電話：042-850-5469

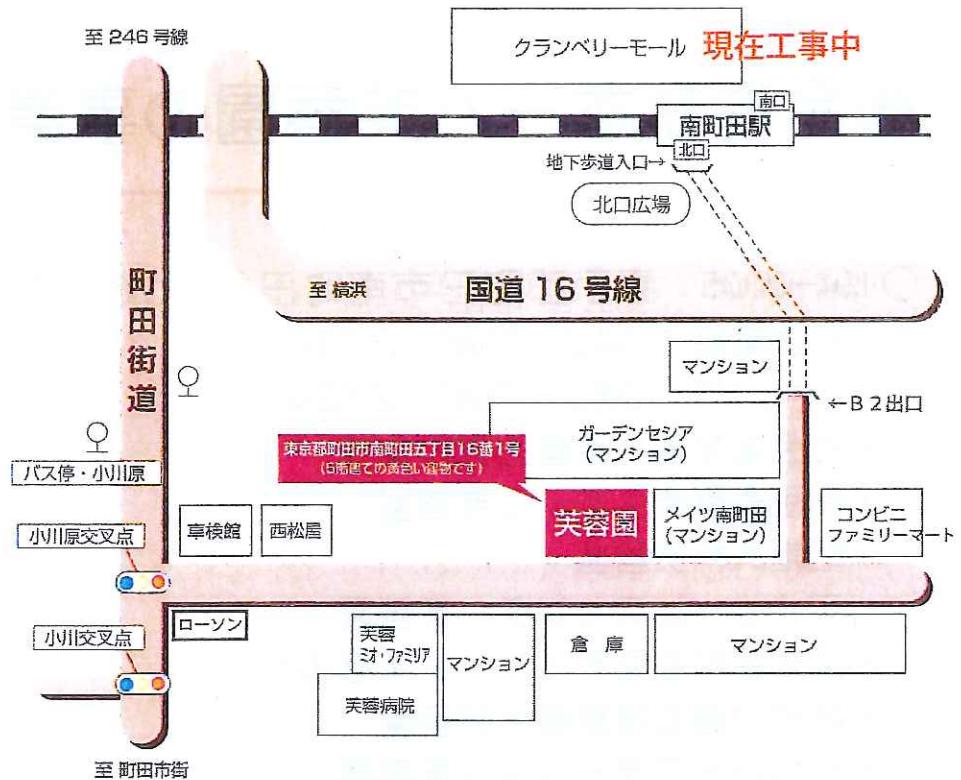
○194-0003 東京都町田市小川 6-1-11

- ・小川あんしん相談室（町田市受託事業）

電話：042-850-6234

- ・地域交流スペース ほっとステーションながれぼし

電話：042-862-0120



【電車】東急田園都市線南町田駅下車北口より地下道を通りてB2出口 徒歩7分

【バス】小田急町田駅、JR町田駅下車

バスセンター9番より鶴間行きにて20分小川原バス停下車 徒歩5分

【自動車】東名横浜・町田インター下車、町田、八王子出口より10分

第7回（2019年度）

芙蓉園園内改善活動発表会抄録集

開催月日：2019年8月30日

発行者：社会福祉法人芙蓉会 総合福祉ホーム芙蓉園

住所：〒194-0005 東京都町田市南町田5-16-1

電話：042-796-2736

FAX：042-796-2734

URL：<http://www.fuyoun.jp>